

防長の自然学散歩－7「奈良に登った長登の銅」

広大な秋吉台の東端に、三方が低い山に囲まれてひっそりとした集落があり、そこが今回の舞台となる「長登銅山跡地」です。「長登」という地名は、天平時代にこの地で採掘された銅が、東大寺の大仏建立のために奈良に登ったという故事から「奈良登り」という地名になり、それが訛って長登となりました。



美祢市・長登銅山

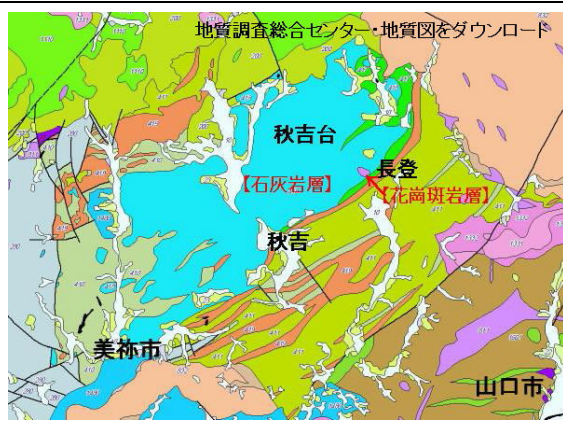
この銅山の地質的背景は、母岩である石灰岩台地の中に花崗斑岩という半深成岩マグマが塊状に貫入してきて、その接触面に沿って熱水やガスに依る化学反応が進行し、スカルン鉱物と呼ばれる銅・鉛・亜鉛・銀・コバルト等が濃集しました。

この鉱山は、奈良時代から平安時代にかけて、江戸時代に、そして明治から昭和にかけてと、三時期に亘って断続的に採掘され、主として銅が生産されてきました。また、近年はコバルトの数少ない国内の貴重な産出地としても知られています。しかしここも昭和37年には閉山となったのですが、古代からの文化的な歴史も兼ね備えた鉱山として、平成15年に『長登銅山跡』として国の史跡に指定されました。

先に述べた東大寺大仏は、天平15年(743年)に聖武天皇が国家安寧を願って発願し、国の一大事業として約10年の歳月を掛けて造像されたものです。昭和末期に大仏殿周辺の遺構を発掘した折に発見された青銅片を分析した結果、成分が長登の slag と一致した為、長登の銅が大仏鑄造に使用されたと検証されました。

この歴史的事実を基にして、小説「国銅」上・下(帚木蓬生 著、新潮社)が刊行されており、古代の鉱山の採掘や精錬、大仏造像の技法などを肩が凝らずに面白く学べますので、ご興味がおありの方は是非読まれることをお奨めします。

因みに「国銅」とは、聖武天皇の詔に『菩薩の大願を発(おこ)して盧舎那仏金銅像一軀を造り奉る。国銅を尽して象を鎔(とか)し、……』とあり、つまり国じゅうの銅を溶かして大仏を造るという古文書に因んでいます。



秋吉台周辺の地質図



スカルン鉱床の路頭



長登銅山の坑道入口(大切4号)



採取した鉱石サンプル

【お奨めスポット：銅山の諸遺跡、3年前にオープンした長登銅山文化交流館など。長門地方の他のスカルン鉱床としては、近くの喜多平・於福の大和鉱山等がある。】